

きる挑戦的な舞台なのだ。国内と国外、諸分野の交流を目的とする日文研にとって、この木曜セミナーが、その学問的交流の場としての「心臓部」をなしているのかもしれない、とも感じた。

(※補記) 個人的な観点からいえば、翌々日に韓国に赴任する予定であった私にとっては、今回の木セミは、自分自身の限界と課題を強烈に体につける場であり、愛する恩師たちから公式に「送る言葉」をいただく場であった。セミナー後にも、数々の激励の言葉や温かい送別の辞をいただいた。生涯忘れ得ぬ舞台空間を与えていただいた幸運に、ここから感謝している。

(嶺南大学校講師)

元国際日本文化研究センター機関研究員)

アーカイヴということ

森 洋久

現代アートのアーカイヴを通じて、アーカイヴの本質に迫ったシンポジウム「アート・アーカイヴⅢ…今、あらためてアーカイヴを問う」(二〇一三年三月二三日)に参加した。吉原治良が中心となって始まった「具体美術協会」は二〇〇四年に兵庫県立美術館で大規模な回顧展を開いている。あるときは前衛的、あるときは伝統的に、様々なジャンルを縦横無尽に超え、美術館という既成の枠の中に収まりようも無いこの運動を、だが、納めてみようとすることの意味への問いというのが考えさせられるところである。美術館や博物館といった伝統的なアーカイヴ機能の存在に現代アート自身が挑発的に対向してくる時代があったが、現在となると、意識的な対決も消え、ゆらりゆらりとしている。流通し消費される「アート」、エフェメラな「アート」、あるいは、既にデジタル化、アーカイヴ化されたかのような「アート」、アーキヴィストにとっては手強い相手がどんどん生まれている。何を何のためにアーカイヴするのか、会議が白熱した。

私も末席ながら話す機会があった。アーキヴィストの役割は伝えられてきたものを後世に残して行く仕事である。後世に物事を伝える役割を負った組織や人は、美術館や博物館などの組織の他にも古来から存在した。だが、それらの様々な人や組織が、現代的なアーキヴィストのような考え方を持っていた訳ではないし、また、百戦錬磨伝えることに成功してきたわけでもない。一方で、現代的な美術館や博物館、アーカイヴの考え方が、これらの先人に対してとりわけ優れているわけでもない。

伝えられてきたものを後世に伝えるためには、どのような条件が必要か、と問われたとき私の頭に浮かぶ言葉は偶然と奇跡である。私が大阪市立大学在職時代に担当した、大阪市の昭和一七年撮影の航空写真は、全体で約三千カットほどで、北は京都大山崎近辺から、北は堺市、岸和田近辺まで、西は神戸、東は生駒山近辺までおさめた大規模なものである。軍事施設などのピンポイントを撮影したものではなく、広域を網羅的に撮影したものであるということでは大変珍しいものである。大阪の空襲前の古いたたずまいを後世に残す貴重な資料でもあるのだ。このような戦時中の資料は全国的に沢山あったと推察されるが、撮影には軍が関与しているこ



大阪市昭和17年の航空写真

(大阪市都市計画局所蔵、接統作業 大阪市立大学+森洋久)

とは容易に想像でき、終戦と同時にくまなく焼却処分されたと言われている。

嚴重に管理されたと思われるこのような資料をなげいま見ることができるとはだろうか。十数年前に大阪市役所の片隅でぼろぼろになって放置されていたところを発見された。おそらく話は簡単だ。この資料を規則に反して返却し忘れた人が居たのだらう。機密資料を持ち出そうなどと反軍的なイデオロギーを持っていたわけではない。もしやそんなことを思っていたならば、当局によってあつという間に処分されたに違いない。単に間がさしただけである。貴重な資料を我々が手に取るために必要だったことは、あのとき、彼にさしてきた小さな「間」だった。

一人の人や組織の忘却のサイクルは、長くても数十年、百年である。対して、社会的なパラダイムの変化や自然現象は数百年、数千年といったスパンでやってくる。このような長時間サイクルを乗り越え後世に伝えられるものはまれである。三月一日の東北大震災はそのことをまざまざと教えてくれる。大きな津波は古くからあったわけで、その度に神社の社は流された。数百年をかけて、村人たちは安全な場所への思いで知らず知らずと、社を山の方の高い方へ移して

行った。結果的に古い社は今回の大津波から免れたものが多
い。長い月日の中で文書は失われ、石碑は忘れられるが、社
の祭りは、神輿を担架や荷車に持ち替え有事に機能する。国
立民族博物館企画展「記憶をつなぐ」（二〇一二年九月二七
日〜一月二七日）が示唆するところは、神社と行事は単な
る観光資源ではなく、人々が集い生き続けている限り、メッ
セージは彼らの体内に込められ伝えられるということだ。だ
が、この行事も近年の急速な都市化の流れのなかで失われつ
つあることも事実だ。

我々の目の前にある貴重な史料がなぜここにあるか。絶え
ず押し寄せる偶然と奇跡のなか、フットボール選手のように
ボールを受け継いできた果敢な先人たち。デジタル化技術な
ど様々なアーカイヴの技術は現代風に進化しているが、これ
らを駆使して出来ることはなにか。我々に出来ることは、少
し後の未来へ繋ぐお手伝いの程度である。

そんな無力な我々が、それでもなぜアーカイヴを試みるの
か。このように思うとアーカイヴそのものがアートに見えて
くる。

（国際日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授）